

## 日野町の空襲

昭和十六年十二月八日、日本軍の真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争。

最初の頃は快進撃をしていましたが、戦況は悪くなる一方でした。

各地で空襲が頻繁になり、十八年九月には上野動物園で猛獣が薬殺されました。翌十月には学徒動員が始まり、十九年六月には学童疎開も始まりました。

ここ烏山の旧制中学校（現在の烏山高等学校）には通信兵が駐屯していました。在郷軍人による「軍事教練」の授業でも竹やり訓練が行われていたのです。また、燃料不足なので、「松根油」と言う、油を取るための松の根を掘り出しに行ったものでした。

また、食料不足のため、旧制中学校・実践女学校（元烏山女子高等学校）の生徒たちは、那珂川の河原でのさつまいもづくり、現在市役所烏山庁舎が立っているあたりの畑での野菜づくりなどの奉仕作業も行ったのでした。

そのさつまいもづくりのときに、そっと懐に何もづるを忍ばせた生徒は、

「泥棒になる」

と生徒にとがめられ、

「畑に戻した時の悲しさは忘れられません」

と当時の女学生は涙ながらに話してくれました。

また、ある時、小学生の下校の時間に空襲警報が鳴り、病弱の子をかばいながら、友人何人かで塀のわきの側溝に身をひそめ、飛行機が過ぎ去るのをじっと待ったこともあったそうです。

ついに、昭和二十年七月七日夜半、日野町（現在の旭一、二丁目）は焼夷弾攻撃を受けたのでした。

降りしきる雨の中、わずかに聞こえる爆音で雨戸をあけたところ、爆音大となり家族を起こした人あり、雷か、いなずまか、と目を覚ました人ありと、さまざまでありました。目の当たりにした人は、花火のごとく落下する焼夷弾と、ちようど、収穫時期の麦畑が、ぱちぱちと音を立て燃え広がる光景でした。

「あたかも真昼のようであった」

と、当時の少年の心には、今も鮮明に残っているのです。

また、ある人は、自力で掘っておいだ防空壕に潜り込もうとしたとき、すでに、ほかの人がはいっており

「あの非常事態の中では、ほかの人を思いやる余裕は、なかったんだろうな」

と、当時の出来事を振り返るのでした。

焼夷弾落下による火災の発生により、消防団員や隣組なども出動しましたが、全焼七戸、半焼一戸、罹災者七十三名、志望者一名を出したのです。焼夷弾は日野町から川を越え、上境にまで落とされたのでした。集められた弾筒はトラック二台もの量があり、当時の烏山警察署の庭に山のように積まれたのでした。この回収作業で不発弾により重傷を負った人もありました。

昭和二十年八月十五日、悲惨な戦争は終わっても、なお続く食糧難に

「おなかすいたよ。あしがいたいよ」

と言う、幼子の手を引き、赤子を背負い、いもなどを求めて農家を巡ったというお母さんもいたそうです。

この小さな町に空襲があり、被害があったことは、人々の記憶からは薄れ、忘れ去られようとしています。

「次の世代に語り継いで行かなくては」

との思いと、こうして私たちが生きていることの素晴らしさ、幸せに気づき、戦争の恐ろしさ、無残さ、悲惨さ、悲しさ等々を風化させること無く、平和の尊さを伝えて行くのも私たちの使命かと思いました。

参考文献 「烏山町史」昭和五十三年発行

地域の皆さんの体験から